

聖母に倣いて ——スウェーデンの聖ビルギッタ思想を通した《聖トマス祭壇画》磔刑図の聖母のまなざしの考察——

奥村あゆ（京都大学）

本発表の目的は通称マイスター・フランケ《聖トマス祭壇画》（1426-35年頃、ハンブルク美術館）磔刑図断片に描かれた聖母のまなざしの考察である。本聖母像は鑑賞者へ視線を向けているが、その解釈は未だ試みられていない。シュトリーダーらは本作の聖母像を中世末期ヨーロッパ全土で流行した「気絶する聖母」の系譜に置いた。また鑑賞者を見つめるいくつかの磔刑図聖母の同時代作例があるが、これらが哀悼の表情を見せる一方、本聖母像はその要素に乏しい。そこで本発表では本聖母像が気絶しそうになりながらも哀しみを強く表さない表情であることの特異性を明らかにした上で、スウェーデンの聖ビルギッタ（1303-1373）の思想を参照し、この逸脱とまなざしの説明を試みる。

最初に「気絶する聖母」の流行から中世後期の聖母崇敬の様相を詳らかにする。中世後期の聖母崇敬の根幹は聖母への神への執り成しの祈願であり、信仰実践の真髄は受難への共感である。イエスの苦しみ共鳴するように深い哀しみから気絶する聖母像は、受難への共感促進に適うことから隆盛を極めた。したがって聖母の哀悼の表情は当時の信仰潮流に適合するものであり、本聖母像が気絶する聖母の系譜を引きながらもその決定的要素である哀しみの表現を欠くことは特異である。

続いて中世後期の視覚理論を詳らかにする。中世において、視覚感知された対象の印象は見る主体に精神的・物理的変容をもたらす強力な宗教行為とされ、見る者の視線に真の信心があれば物質的像が神聖な彼方と此方の通路となるという、像と鑑賞者の相互作用の関係性が重視された。このことから、鑑賞者を見つめる聖母は鑑賞者と神聖世界を強靱につなぐことを意図した表現と読める。さらに、思索に耽る態度または中世の女性の模範的態度であった受動的な服従を意味した伏し目ではなく、鑑賞者を直視する本作の聖母には、確信に満ちた積極的役割の期待が見出し得る。

以上の知見を踏まえた上で、本祭壇画の降誕図像への影響が指摘されるスウェーデンの聖ビルギッタ思想を紐解く。聖ビルギッタの『啓示 (*Revelaciones*)』や『天使の説教 (*Sermo Angelicus*)』において聖母は全信者の長として表される。さらに同時代の宗教思想からビルギッタ思想を際立たせる独創的な点は、聖母を幸運な受動的な存在ではなく自らの並外れた敬虔さで恩寵を勝ち取った積極的仲介者とすることである。このビルギッタ思想の特性に注目しつつ、同時代の他の宗教思想や聖母表現と比較検討することで、本祭壇画の聖母像の特異性は、聖ビルギッタが主張する、積極的仲介者であり鑑賞者が倣うべき模範的キリスト者としての聖母像と適合することを明らかにする。

以上の考察を経て最終的に、バルト海沿岸地域での聖ビルギッタの甚大な求心力についての近年の研究成果を援用し、作者情報不明瞭の本祭壇画制作直近の環境にもその強い影響を見出し得ることを指摘する。